



初めて飛行機に乗った（前編）



株式会社エフ設計コンサルタント

田中 昌治

TANAKA Shoji

情報工学部門

はじめに

24歳の春、生まれて初めて飛行機になりました。その時の旅行記です。

登場人物は、親友のナリトとボク（当時の私）、旅先で出会った人々です。

1984年3月13日に出国し、3月26日に帰国、2週間のヨーロッパ往復の旅です。

ダイヤモンド・スチューデント・ツアー

卒業の年、恩師のK先生からパンフレットをいただいた。それがダイヤモンド・スチューデント・ツアー。学生向けの格安旅行プランで、世界中どこへでも、格安の航空機で行ける。ヨーロッパ往復でも一人12~15万円だ。早速、ナリトに電話した。ナリトは実家の建設会社で働いている。

ナリト「ちょうど仕事の切れ目だから行ける」

ボク「それじゃ申し込むからね」

出発

出発は成田空港。ナリトには前日に豊橋にあるボクの学生用アパートに来てもらった。

翌朝、成田空港まで移動する。洗濯は旅の途中でしようと思っていたから、二人とも荷物は少ない。春は間もなくだったけど、ジャンパーは着ていた。

大切なパスポート、初めて持ったマスターカード、トラベラーズ・チェックと（妹からのカンパの）現金は、首からぶら下げたポシェットに入れてある。ナリトは上着の内側に袋を縫い付けてもらい、その中に入れてある。それと、大切な航空券、ユーレイルパス（鉄道チケット）も入れた。カバンの中は少しの着替えと地球の歩き方、トマス・クックのヨーロッパ時刻表、旅行会社から届いた説明書だけだ。



シンガポール航空

初めて乗った飛行機はシンガポール航空のボーイング機だった。何とか搭乗の手続きをすませ、いざ搭乗。ナリトがボクに窓席を譲ってくれ、外がよく見える。後方のエコノミー席だけ広い。それでは、旅の安全を願って、小さい小さい瓶のウイスキーで乾杯。

エンジンが4個もついている。行先はシンガポール。飛行機はすごい。ものすごく加速すると、フワット浮いた。あっという間に地上が小さくなる。これが飛行機か、感動した。

しばらくすると、食事の時刻。とても美味しい。これが機内食か、また感動した。

ナリトは早速、客室乗務員さんと仲良くなつて、ワインを飲んでいる。ボクはお酒が飲めないのでコーラを飲む。ナリトも生まれて初めての飛行機だ。

チャンギ国際空港

シンガポールのチャンギ国際空港に夜中に到着する。ここはトランジットなので、飛行機会社がホテルを予約してくれている。空港からホテルへタクシーで移動する。ちょうど日本から来ていた、ボクらと同じツアーの学生二人と一緒にホテルへ。

ドライバー「シンガポールへ旅行なの？」

ボク「ヨーロッパまで行きます。ここはトランジットです」

ドライバー「明日のフライトは？」

ボク「夜です」

ドライバー「それならシンガポールを案内するよ。4人で〇〇ドル。どう？」

にわかに集まつたボク達 $2+2=4$ 人で話し合い、せつかくだから頼むことにした。

ドライバー「OK。朝9時にホテルまで迎えに行くからね」

シンガポール観光

初めての海外観光だった。マーライオンやセントサ島、怖かった南国ワニ園、とても楽しかった。ただ、日本は冬だけど、ここは夏、暑かつた。ジャンパーは脱いだ。ナリトは上着の内側に貴重品を縫い付けてあるので、上着は脱げなかつた。さぞ暑かつただらう。

シンガポール観光の最後は、タイガー・バーム・ガーデン。極彩色の像がひしめく不思議なガーデンだ。ボクらは、あまり関心がなく、早めにガーデンの外へ出る。



タクシーがない

待っていてくれた場所にタクシーがない。いったいどこへ？ナリトとボクは、貴重品を身につけていたので、そのうち帰ってくるだらう程度。だけど、にわかにチームになった、あの二人は、とても慌てだした。二人とも大きいスーツケースをタクシーが持つていってしまつたから。「これで旅は終わった」とか「警察に行かなきゃ」とか言い出した。

ナリト「もう少し待つてみようよ」

ボク「そうだね」

10分くらい待つていると、タクシーが帰ってきた。一応、このミニツアーの仲介をボクがしたので、ここは黙つていられない。

ボク「どこへ行ってたの。みんな怒つてるよ」

ドライバー「ごめん、ごめん。近くまで、どうしても乗せて行けという客がうるさくて、でもこんなに早くガーデンを出てくるとは思わなかつたよ」

ボク「・・・」ガーデンが面白くなかったとは言えなかった。
無事にチャンギ国際空港に夕方到着する。

二回目の飛行機

夜、二回目の飛行機に乗る。やっぱり感動。空を飛ぶことはすごいことだ。そして豪華な機内食。二枚目のナリトはまたも客室乗務員さんと仲良くなり、ワインを飲んでいる。次の到着地はアブダビ国際空港だ。

アブダビ国際空港

アラブの国だ。ターバンを巻いた石油王がいっぱいいる。アブダビ国際空港は給油のための中継地だ。乗客は全員飛行機から降りて、待合室で待たされる。中東を感じさせる変わったデザインの壁にもたれて、ボク達は給油の終わるのを待つ。

ヒースロー空港

間もなくイギリスのヒースロー空港に到着だ。早朝の景色が窓から見える。教科書で読んだベンとルーシーが暮らす国だ。この旅では、現地到着時に旅行会社がオリエンテーションをしてくれる。それと、到着したその日はホテルを用意してくれる。

空港にはロンドンで暮らしているお兄さん風の男性が迎えにきてくれた。ナリトとボク以外には、タイガー・バーム・ガーデンで一度は旅行をあきらめかけた二人と、もう別の人、合計六人だ。空港からは地下鉄でロンドン市街のホテルまで案内してくれた。

ロンドンの地下鉄

空港で地下鉄に乗ったときは、ほとんど乗客はいなかった。席は一人一人の間に仕切板があった。面白いのは、吊り輪だ。日本の吊り輪はドーナツ形になっているが、球だ。丸い。ボールを握るように、吊り輪、いや吊り球を持つ。不思議だ。

ロンドンまで約1時間、ロンドンに近づくにつれて、人がどんどん増えていく。そうだ、通勤ラッシュなのだ。通勤を経験したことがないボクは、初めての通勤ラッシュをロンドンの地下鉄で体験することになった。そして宿泊先の VIENNA ホテルに到着した。

オリエンテーション

空港から案内してくれたお兄さんが、引き続き、オリエンテーションをしてくれた。内容は、どこが安全で、どこが危険かだ。明日から自由行動になるので、自分の身は自分で守れということだった。イギリス、フランス、ドイツなどは安全、スペインやギリシャは危険、特にスペインは危険なので、できれば行かない方がいいと言っていた。(これ、当時の話)

縁あって集まった六人「みんな気を付けて、楽しんできてね」

お兄さんにお礼を言って、六人は解散した。

CULTUREバス

オリエンテーションが終わったので、ホテルの部屋に荷物を入れ、ナリトと二人でロンドン見学に出かけた。先に二階建てのCULTUREバスで周遊して、ところどころで降りて、見学する案を出したら、ナリトはOKとのこと。このバス、2.5ドルで乗り放題。

さあ、行こう。二階建てバスは空いていて、軽快に走る。ビックベンは工事中で、半分シートで覆われていた。街はレンガ風の建物でとても綺麗だ。そして街がテムズ川に調和している。

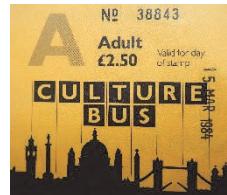
最初にハイドパークで降りた。ここでベンとルーシーはよく遊んでいた。

ボク「ハイドパークを散歩しよう（地図を見せて）公園を横断できるよ」

ナリト「公園は興味がないな」とのこと。

では、再度、二階建てバスに乗って、次は大英博物館へ。たくさんの作品が展示されていた。入館するのは無料だ。無料の理由は、イギリス政府が常設展示を国民の福利厚生と捉えているからだ。

ホテルまでは近いので、歩きながら、途中、夕食を買った。ヒースロー空港への到着前に機内で軽食が出たが、もう夕方でお腹が空いていた。牛肉のハンバーガーを2個買い、ナリトが飲むビールとオレンジジュースを買って、ホテルの部屋で食べた。後で大問題となったイギリスの狂牛病はこの頃に発生していて、かなり後になって、数年間献血をさせてもらえなかった。



ロンドンを出発（キングス・クロス駅）

フランスへはドーバー海峡を船で渡る。ロンドンのキングス・クロス駅に朝早く行き、学割の特急券を買うつもりだ。通常の切符売り場では売っていない。駅構内にいる人に聞いてまわったけど、誰も知らない。朝の通勤時刻は、職場へ急ぐ人ばかりだ。

それでも絶対に学割特急券を買うと決めていたので、かなり頑張って、聞いてまわったけど、切符売り場を探せない。

ナリト「もう疲れたよ、学割でなくてもいいんじゃないかな」

ボク「絶対あるって見たよ（この地球の歩き方に書いてある）」

1時間近く、そうしていたので、ボクも疲れて、この駅を見るのは最後かもしれないと、駅の外に出た。

ボク「あった」

小窓が駅建物の外壁に開いていて、そこが学割用特急券売り場だった。



ロンドンからドーバーへ（ドーバー・プライオン駅までの列車内）

とても美しかった。今まで見た景色の中で、一番綺麗だった。木立に囲まれたレンガの家、綺麗に整備された街路樹、芝生の横を小川が流れる。絵本の中の世界みたいだ。列車の窓にひつつき、景色を見て、うつとりとしていた。到着は1時間後だ。

ドーバー・プライオン駅に近づいてくると、どんどん乗客が増えてきて、立っている人もとても多くなる。列車内の音声案内も増えてきた。間もなく終点だなと思った。

車掌案内「〇〇は終点まで行きませんので、ご注意ください」そう言った。

〇〇が聞き取れなかつたので、近くで立つておじさん聞いてみたら、

おじさん「この車両は終点まで行かないよ、先頭から2~3両までに乗らないと」

おじさんにお礼を言って、ナリトと慌てて下車、ホームを走つて、先頭の車両に移動する。先頭の車両も満員だつたけど、無理やり割り込んだ。

ドーバー海峡を渡るフェリー

フェリーに乗ると、最初にフランスへの入国手続きがあり、無事ナリトと二人、関所を通過する。途中、ドイツ犬のシェパード君が、乗客の荷物や服を嗅ぎまわつていた。ボクらも嗅がれたが素通り、横にいた「あんちゃん」風の若者に、吠え掛かつていつた。なにか持つていたのかな。

フェリーの中も混んでいた。当時、イギリスとフランスの行き来は、このフェリーが主だ。ベンチも満席で、ナリトとボクは通路に座り込んだ。しばらくして、多くの乗船客が葉巻を吸いだした。お酒も飲んでいて、とてもうるさい。ボクは葉巻の匂いに気持ちが悪くなり、船酔いでめまいもして、最悪の気分で、うずくまつっていた。早くフランス側のカレー港に到着するのを祈つていた。すると、

ナリト「お腹が空いた、なにか食べたい」

そうだ、今日も朝、食べただけだ。ナリトにカバンを預け、船内の売店へ行き、サンドイッチとコーヒーを買って、ナリトへ渡してから、ふたたびうずくまつた。ナリトは強い。

カレー港からパリへ

カレー港からふたたび列車に乗つて、目指すはパリだ。3時間近く乗つてたけど、よく覚えてない。地獄のようなフェリーから解放されて、安心したのか、ぼーっとしていた。イギリス郊外の風景とは違ひ、ザ・ヨーロッパという感じだった。(都市という感じ)

パリ・ノール駅

パリ・ノール駅に到着、完全な大都会だ。次の乗り換えのため、オステルリツ駅に行く。大学の友人から、パリでの駅間の移動はバスが便利だと聞いていたので、さっそく歩いているご婦人に、

ボク「こんにちは、オステルリツ駅に行くバス乗り場を教えてください」

ご婦人「英語ね(新鮮という感じ)あの階段を昇つて地上にでればバス乗り場があるわ」

ご婦人は英語で話してくれた。

ご婦人にお礼を言って、地上へ。でも解らない。うろうろしていると、

ナリト「タクシーで行こう」

辺りは薄暗くなり、今にも雨が降りそう。霧の都はパリだったっけ？ロンドンではなかつたの、ロンドンは晴れていたけど。

オステルリツツ駅

タクシーの運転手さんは黒人の男性だった。わかったと言って、混んでいるパリの道を上手に運転してくれた。あまり話さなかったが、優しそうな人だった。15分ほどでオステルリツツ駅に到着。さあ、これからタルゴ寝台特急だ。



タルゴ寝台特急

タルゴ寝台特急は、レンフェ（スペイン国鉄）で開発された一軸台車連接型客車およびそれによる列車の総称だ。軌道の幅が変わっても、列車自身で車輪の幅を変更できる列車だ。昔、フランスとスペインは仲がよくなかったそうで、レール間の軌道幅が違う。以前は、わざわざ国境で列車を乗り換えていたが、タルゴ寝台特急は、乗客を起こすこともなく、深夜、国境付近で、ゆっくり動いたり、停まったりを繰り返しながら、車輪の軌道幅を変えている。

タルゴ寝台特急の乗車口へ行くと、何か揉めている。

若者「なぜトラベラーズ・チェックで、特急料金を払えないのか？」

車掌「現金かカード支払いをお願いします」

やりあいは数分続き、若者はあきらめたみたい。

ナリトとボクは、4人部屋のコンパートメントに入り、荷物を棚にのせ、食堂車へ移動した。朝、ロンドンを出発して、パリまで来て、今から夜行列車でマドリードを目指す。そう、ボク達はスペインへ行く。ほとんど食べていなかったので、食堂車でリッチに夕食だ。コース料理だった。半分赤いステーキ、ナリトはワイン、ボクはコーラ。とても美味しいかった。カビだらけのチーズにはびっくり。海外のチーズはこんなものだとナリトが言った。

疲れていたこともあり、すぐに眠れた。夜中、なにやらゴトゴト、そっと窓のカーテンから外を見ると、車輪幅を広げている。スペイン側が広い。しばらく見ていたが、また、すぐに眠った。

間もなくマドリード

間もなくマドリードに着く。同じコンパートメントの乗客のおじさんは出発の準備をしている。ボク達も準備（って歯磨きくらい）をすまし、ベッドを畳んで、椅子に戻し、座ったら、ちょうどおじさんと向かい合う形になった。

おじさん「君たちはどこから来たのか？」

ボク「日本です」

おじさん「遠いところから来たのだね、わしはパナマからだ、パナマを知っているか？」

ボク「はい、中南米の運河のある国ですね」

おじさん「仕事でフランスに来て、せっかくだからスペイン観光だよ。君たちはどこまで行くのか？」

ボク「マドリード、それとグラナダなどです」

おじさん「マドリードは都会だから心配はないけど、グラナダは田舎で治安も悪いから、十分気を付けるんだよ」（これも当時の話）

ボク「わかりました」

マドリード

快適にボクらを運んでくれたタルゴ寝台特急は、ゆっくりとマドリードの中心駅であるアトーチャ駅に到着した。夜通しで走ってくれたタルゴ寝台特急に感謝。アトーチャ駅は広くて、天井も高くて、とてもかっこいい。

一番先にすること！それは、今日の宿探し。アトーチャ通りを歩いていくと、多くの商店やホテルが並んでいる。その中でホテルサーの看板が目立つ。二人とも、ここでいい。

意見があったので、早速フロントへ。英語は通じた。

ボク「今日、一泊したいので、お部屋空いていますか。二人なのでツインがいいです」

ホテルマン「空いているよ、一泊でいいのかな」

ボク「では、お願いします。前払いですか」

ホテルマン「チェックアウト時でいいよ」

ボク「OKです」

ホテルマン「観光なの？」

ボク「はい」

ホテルマン「じゃ、闘牛どう？」

ナリトに聞くと、見たくないって。

ボク「闘牛は見たくないです」

ホテルマン「じゃ、フラメンコどう？」

ナリトに聞くと、是非行きたいとのこと。実はナリトはプロ顔負けのギタリストだ。中学からクラシックギターを独学ではじめ、いまではフラメンコも弾いている。とても上手だ。その影響でボクも高3から始めたが、音楽の才能はボクにはなかった。

ボク「フラメンコは行きたいです、いくらですか」

ホテルマン「食事付きで○○ペセタだよ、いいかな」

ナリトに聞いたら値段もOK。

ボク「よろしくお願いします」

ホテルマン「じゃ予約しとくね」と店の名前、地図、行き方を書いた紙をくれた。

ホテルマン「先に食事だよ、その後、フラメンコショーだよ、楽しんで」

ボク「了解です」

ボクは恩師から渡されていたものを思いだした。



恩師のN先生「これを持っていけ、ご婦人へのプレゼントだ。海外ではとても喜ばれる」
それはパンストだった。

ボク「N先生、ありがとうございます」

N先生とK先生には無理をお願いして、修士論文を期限よりも1か月前に提出して合格を
いただいた。おまけに修了式も欠席させていただいた。

ボク「これ、日本のお土産です。ぜひ奥様へプレゼントしてあげてください」

ホテルマン「オー、ママ、喜ぶよ。グラシアス（ありがとう）」

プラド美術館

マドリードに来たらプラド美術館だ。歩いて行ける。途中のオープンカフェで朝食、外で
食べる朝食も美味しいね。寒い記憶はあまりないので、地中海式気候は温暖なのかも。

プラド美術館も壮大だった。世界有数の美術館。何を観たかは、あまり覚えていない。ナ
リトはいろいろと記憶しているらしい。

館内の案内をしているお爺さんが、写真OKだよってゼス
チャーをしてくれたので、超有名と言われた油絵の前でポー
ズをきめる。あとで見たら、ストロボが絵画に反射して、白
いものがボワット映っている。これじゃ価値ないな。



スペイン広場

ドン・キホーテのいるスペイン広場 (Plaza de Espana) へ
行く。ドン・キホーテに挨拶をして、広場のベンチで座って楽
しんで。来て良かった。



ドンデ エスタ ここ

夕方になったので、ホテルマンに教えてもらったお店に行った。マドリードは徒歩範囲に
いろいろな店がある。地図の場所まで来たけど、お店が解らない。

♪あとで、丁寧に説明するが、ダイヤモンド・スチューデント・ツアーやパンフレットを
いただいたK先生の奥様は、スペイン語の翻訳をされていて、同じスペインが好きだとい
うことで、とてもお世話になった。K先生の奥様がスペインで会話に困らないようにと、日常
で使うスペイン語を便箋10枚に書いてくれ、それを持たせてくれた。

それを見ると、「すみません、ここはどこですか？」は「コンペルミッソ ドンデ エスタ
ここ」だ。早速、道行くご婦人に聞いてみた。

ボク「コンペルミッソ ドンデ エスタ（ホテルマンからもらった店の地図を指さして）」

ご婦人は、地図を見て、少し考えて、辺りを見回して、そして笑った。そう、ボクらが立
っていたところにお店があって、ここだと言う。

でも、ガラス扉は鍵がかかって、さっき押したけど、開かなかった。ご婦人にお礼を。

ボク「ムーチャス グラシアス（ありがとうございます、これもK先生の奥様から）」

ご婦人「（笑いながら）アディオス（さようなら）、ブエン ビアヘ（よい旅を）」

笑顔でお辞儀をして、手を振った。

再度、お店の前に立つと、さっきはいなかった係りの人がボクらに気づいて、近寄ってきて、鍵を開けてくれた。営業時刻はフラメンコショーが始まる夕方からだったみたい。ボクらが早く着き過ぎていた。

フラメンコショーの前の食事会

バスで食事をするお店に連れてていってくれた。他の客もいた。国籍は様々だ。

お店について、店の係りがテーブルまで案内してくれた。テーブルは4人掛け。ボク達が先に座って待っていると、店の係りが男性二人を案内して、ボク達の前に座らせた。ボク達は旅で出会う友達（中年の日本男性）に挨拶した。

男性1「日本人なの？日本から来たの？旅行？」

男性二人は日本の商社マンで、パリで商談があつて、それが済んだので、マドリードへ遊びに来たとのこと。

まさか、マドリードで日本の方と食事をするなんて思っていなかつたので、ボク達は若造だけど、すっかり打ち解けた。

さあ、ワイン（ビノ）で乾杯だ。ボクも少しあつた。ナリトは嬉しそうに飲んでいる。ビノ チント（赤ワイン）、ビノ ブランコ（白ワイン）、コース料理だった。スペイン料理がいろいろと運ばれてくる。メインはパエリヤ（魚介類の炊き込みご飯）。3人は絶好調、ビノが底をついてきた。男性2が店の係りの女性を呼んで、英語で交渉を始めた。

男性2「ワイン お代わり、持ってきて」

店の女性「コースでお出しするワインは、すべてお出ししました」

男性2「そんなこと言わないで、ワイン、持ってきて」

店の女性「そういわれても困ります」

男性2「せっかく日本から来たのに、お金払うから持ってきて」

店の女性は困った顔をして、戻って行った。しばらくして、

店の女性「ワインお持ちしました。サービスです。これでよろしいですね」

男性1、2「ありがとうございます、お嬢さん（とか言っていた）」

ナリトも飲んでいた。



本場、フラメンコショー

初めてのフラメンコショーだ。前の方の席に座らせてくれた。男性1、2はボクらのすぐ後ろだ。情熱の踊り、かき鳴らすフラメンコギター、ラスゲアードという。圧倒された。ナリトはギタリストの方を見ていた。ナリトは踊りには興味はないのかも。

ふと、ボクの背中に、なにかがコツ、コツと規則よく当たる。振り返ってみると、男性2人がコクリ、コクリと居眠りをしていた。酔って、気持ちよくなつて、眠くなつたみたい。

ショーが終わり、大勢の客をバスに乗せて、それぞれのホテルへ送ってくれた。なぜかボク達のホテルサーは一番後だった。星の数で決まったのかな。

セゴビア

アトーチャ駅から列車で1時間北上したところに、セゴビアという町がある。次の日の朝そこへ出かけて行った。セゴビアにはローマ水道橋やセゴビア大聖堂、アルカサル（王宮）があり、スペインの世界遺産だ。駅の売店でボカディージョ（K先生の奥様に教えていただいた、生ハムをフランスパンで挟んだもの、とても美味しい）とコーヒーを買って、出発。

駅でのちょっとしたトラブル

セゴビアの観光を終えて、マドリードへ戻るため、駅の待合室で待っていた。すると隣に座っていたナリトが、

ナリト「ホームへ行こう」

ボク「まだ早いよ」

ナリト「いいから」

ホームに移動した後、聞いてみたら、とてもガラの悪い人達が、待合室にいる人に、たかっていたのだって。知らなかつた。ボクは、景色は見えても、まわりは見ていないようだ。

グラナダ

午後、グラナダへ出発する。ナリトもボクも、この旅の目的はグラナダへ行くことだ。

そうだ、昨夜は、この旅で初めての洗濯をした。ジーパンを洗つた。ホテルサーには広めのバスルームがあり、トイレと共同になっている。手洗い場の横に、洗濯ができる流しがあり、そこを使った。スペインのホテルは便利に作られているな。（あとで日本に帰国してから知ったのだが、そこは洗濯ができる流しではなかつた）

この続きは後編です。

（後編の内容）

- ・グラナダ（オレンジ色の街）
- ・アルハンブラ宮殿、最高に幸せ
- ・フラメンコギターを買う
- ・ホテルサーのバル（セルベッサ）
- ・パリのとても甘いワイン
- ・アブダビでの腹痛
- ・朝までチャンギ国際空港
- ・チャンギ国際空港でのジャンケン大会、そして東京の牛丼と味噌汁、等

